長春留学体験記

吉林大学（修士ダブルディグリー）

経済学研究科 2010 年修士修了　伊藤　健

留学先　吉林大学　（吉林省・長春） 東北アジア研究院・修士号課程 （学位取得奨学生）	期間 2005 年 3 月～2008 年 3 月

■はじめに

奈落の底に突き落とされるようなアクシデント、目の前の全てが光り輝いて見えるような幸福な昼下がり。自分の予想の範疇を大きく超えた、価値観を根本からひっくり返すような出来事は唐突にやってくる。いや賢い学生ならそんな出来事を予知し、準備し、何事もなかったかのように対処できるのかもしれない。しかし残念ながら自分はそのような学生ではなかった。必然「忘れられない出来事」にある日突然正面衝突することとなる。

私は中国吉林大学東北アジア研究院に交換留学生として留学をした。3 年と長い留学生活であった。その留学生活を思い返すと、どうしても消去できない経験をした日が何日かある。

2005 年 3 月 31 日（渡航日）
2006 年 9 月 11 日（大学院講義開始日）
2006 年 5 月 30 日（悪夢の論文テーマ発表会）
2008 年 5 月 25 日（論文発表会）

この 4 日について記したい。

申し訳ないが留学のアドバイスや街の情報等を記す気はない。潔く他のガイドブックや中国留学指南書を当たり情報を精査、準備に勤しんで欲しい。以下は私にとって、今でもその全てを思い返せるような幾つかの体験の記録である。

2005 年 3 月 31 日（渡航日）

■長期であろうが短期であろうが、行く国がどこにせよ、留学初日（渡航日）は忘れがたい 1 日である。「海外に行く」という特殊な行動をする日、留学に対する期待、興奮、そして少なからずの緊張感や不安が入り交じった日、何より新しい文化の中での生活の第一日目、という異例づくしの一日である。

私にとっても 2005 年 3 月 31 日、中国渡航日はやはり特別な日となった。数年経った今もなお、丸一日の情景を克明に思い起こすことができる。

恥ずかしい話だが、この渡航は語学・情報・モノあらゆる面で「見切り発車」と言うべきものだった。まず語学面。この渡航段階に至っても私が中国語で知っているのは「ニーハオ」だけという惨状。第二外国語で中国語をとっていたわけでもなく、「私は伊藤健です」と自分の名前を言うことすらできなかった。モノの面でもこの留学の最重要アイテム、中国語電子辞書を購入したのは渡航数日前。ガイドブックの類は指導教授からせっつかれるように購入していたものの、読まれた形跡は殆どなく、行きのスーツケースを重くしているだけだった。実のところ現地に渡航しなお、自分が地球上のどの辺りにいるのか怪しいという状態で、留学生としては明らかに失格だった。

この段階において私が長春についてわずかに持っていた情報は「人口 600 万人の大都市」で「吉林省の省都」であること、自動車工業などで発展している「大都市」ということのみである。思い返すと自分は日本の札幌や名古屋にでも留学する気持ちだったのだろう。ある教授から渡航前「まずは無事に学校に辿り着いて下さい」と言われていたのだが、その時は全く意味を理解できなかった。その意味を噛み締めることになるのは現地の空港に着いてからである。

■そんな全ての準備が不足している状態で、その日私は留学先の中国は長春へ向かった。成田へ向かう列車の中では緊張も興奮していなかった。出国を済ませ中継地、北京へ向かう飛行機の中でも何度も乗っていた「東京－札幌」の飛行機と同じ気分だった。旅慣れているという根拠の分からない自負があったのかもしれない。午前中はむしろ「余裕」だった。

事態が一変したのは成田を発って 4 時間後、経由地の北京であった。海外経験がほぼゼロだった自分はまず「乗継」と「入国審査」の分かれ道すらスムーズに進むことができなかった。無論「これどっちに行けばいいの」と聞くだけの語学力も持ち合わせておらず、しばし迷った後、確か現地の旅行会社の添乗員らしき人に航空券を見せやっと入国審査に向かうこととなった。入国スタンプを押された後もトラブルは続く。インターネットをしようとインフォメーションセンターで「Where is a internet cafe?」と聞いたが、指示された先は喫茶店（確かスターバックスに似せたような）だった。空港に降り立ち「あぁ本当に全て漢字で書かれているのだな」などと相変わらずのんびり構えていたが、今さらながら英語が全く通じない、つまりコミュニケーションがうまく取れないということに気付か

され、突然「海外に来た」という冷たい事実、全てが異例の中に自分がいることに気付く。体中に緊張感が走り、背中にこわばりを感じる。北京の空港で初めて両替し、中国の通貨、人民元を手にしたが、結局北京では一度も使うことができなかった。北京到着は昼飯時で空腹だったものの昼食を買うことすらできず、備え付けの給水器で水を飲むのがやっとだった。ロビーの中の店を眺め「あれ食べたいな」と思いながらも飛行機を待つ間、汚い人民元を固く握り締めていた。

午後北京から約 1 時間半、飛行機が長春の空港に着いたのは午後 4 時頃、わずかに空が灰色だった。しかし日本を出て約 7 時間、辿り着いたのは自分の知っている「空港」ではなかった。今でこそ長春の空港は新しい近代的な空港になったものの、自分の渡航当時の長春空港は誰もが「これが本当に空港？」と思うような、古臭い平屋建てで、途上国のバスターミナルを思わせるシロモノだった。飛行機を降りるとまずペンペン草が生える地平線が見えそうな広い滑走路の上を怪しい建物まで歩かされる。建物に入るとは灯りが殆どなく薄暗い。ラゲージレーンはスーツケースを 10 個流せば一杯になってしまうのではないかと思うほど小さかった。レーンはギーギー音をたていつ止まってもおかしくなく、スーツケースは届いていないのではないかと想像させるに十分なものだった。空港といえばどんなに小さくとも清潔、明るい蛍光灯、英語表記、最も近代的な空間…自分が辿り着いたのは自分がそれまで空港に対し持っていた常識と真逆の空間だった。

しかし本当の困難は空港の外に出てからである。空港はゴールではない。大学にたどり着かなければいけない。スーツケースを受け取り空港の外に出ると大勢のタクシーの運転手が身構えている。彼らからしてみれば、シルバーの明らかに外国製とわかるスーツケースを持っている自分は明らかにその空間から浮いており「カモ」だ。あっという間に取り囲まれ、全く理解できない言葉でまくし立ててくる。スーツケースを奪ってタクシーに持っていこうとする奴すらいる。運転手も日本のように小奇麗で、制服を着た人ではなく、短髪、角刈りの髪に顔が少し茶色い。顔には少ししわが寄っている。服装も小汚い上着に中国人が好む黒いスラックス。これが「一般的な中国人」との初めてのコンタクトであったのだろうが、自分が彼らを受け付けないのは明らかだった。手を振ってやっと彼らの勧誘を振り切り、空港建物の入り口で「大変な所に来てしまった」と、自分の置かれたあまりに厳しい現実を強制的に認識させられる。自分の準備不足を呪っても最早遅い。空港を出るでもなく、ターミナルに入るでもなく、1 時間ほど結局建物の入口で混乱した時間を過ごすことになった。

汚い空港、通じない英語、取れないコミュニケーション、囲んでくる運転手の群れ…全てが自分の予想の範疇を大きく超えていた。やばい。大変な所に来てしまった。このまま東京に引き返そうか…。笑い話にしかならないが留学初日、渡航後数分、自分は大真面目に「帰国」を考えていたのだった。気付くと自分と同じ便で到着した人は既におらず自分一人だけが空港に取り残されていた。

■更に悪いことにメールのやり取りの行き違いから自分には迎えがいなかった。空港を出たら自分の迎えがいるのではないかという期待は裏切られ、この全く知らない土地で、自力で大学の寮まで辿り着かざるを得なくなった。覚悟を決めるしか無い。

空港内のカウンターをハシゴし、わずかに英語を話せる人を見つけ市内へのタクシー料金を確認すると、顔をこわばらせタクシーの運転手の汚い群れに飛び込む。午後 5 時を過ぎ、この時間では留学生事務室も開いていないかもしれない。とりあえず駅へ向かえば宿はなんとかなるだろう。「駅」とメモ帳に書き小汚い群れに見せると「バスか鉄道か」と彼らが書いてくる。「鉄道」と応じると、当然のように標準の数倍（50 元）を要求される。しかし負けてはいけない。「15 元」とこちらも応じ、「40」「25」と乱雑な数字がメモ帳に並び、結局 20 元で交渉はまとまりタクシーに乗ることとなった。

空港を離れ、あぁ漢字って便利だなと思うのも束の間、窓の外に見えるのは土気色した平屋建ての家々、ホコリにまみれた「〇〇小吃」という漢字表記の汚い看板ばかり。土埃と落ち始めた夕陽で外はうっすら茶色い。信号で止まると車に人が近づいている。新聞売りか物乞いのようだった。どれだけ走っても延々汚い茶色い家々が並ぶだけでビルはおろか街灯もない。

一向に都会らしさが見られない。自分は本当に駅に向かっているのだろうか。まるっきり騙され、スーツケースごと変な所に連れて行かれるのではないか。もしかしたら自分はここで死んでしまうのだろうか…。本気でそんな最悪の状況を頭に描いた。汗が流れ固く手を握る。「もういい、降ろしてくれ」と何度言おうと思っただろうか。空港から駅の間はそれまでの人生で最も緊張した時間だった。

■数十分後、タクシーが停まった。「長春」と書かれた大きな建物がある。どうやら無事長春の駅にたどり着いたようだった。まだ見慣れない紙幣を確認し赤い 20 元札を渡し、生きていることにひとまず安堵する。スーツケースも無事だった。タクシーから逃げるように歩き出すと、広い車道、行き交う人の波、耳をつんざくように聞こえてくるクラクション、ガラス張りの屋台・・・日本と明らかに異なる異様な雰囲気が漂ってくる。どう見ても途上国の景色だった。テレビでしか見たことない景色の中になぜか自分がいる。初めて見る中国の屋台が目に付く。何か小麦粉を焼いたようなモノ、ゆでたとうもろこしが美味しそうだった。空腹はピークだったが、結局買うことはできなかった。駅前にある、かつて日本が建てたヤマトホテルに入ると英語が通じ、1 泊 198 元。部屋に着くと疲れがドッと押し寄せ、ベッドに倒れ込むと同時に眠りに落ちた。午後 6 時過ぎだったと思う。結局留学初日は食べ物どころか水も買えず、ほぼ飲まず食わずだった。夜一度売春婦らしき者にドアをノックされたが、それを断ると朝まで目をさますことはなかった。

こうして自分にとって長い長い 2005 年 3 月 31 日は終わった。翌日朝駅前でタクシーと再び筆談で交渉するとあっさり自分を大学まで運んでくれ、留学生寮に到着した。2005 年 4 月 1 日、自分の長春での留学生活はこうして幕を開けた。

2005 年 9 月 11 日（大学院講義始まる）

留学は遊びではない。大学院に入れば必然講義を受けることとなる。

渡航後ひとまず語学授業を数ヶ月受けると、いよいよ大学院生活が始まることとなった。しかし初の北大からの留学生だった自分は、大学院に行くまでも大変だった。自分は学位取得を目的に留学したわけだが、渡航当初自分は事務室で「聴講生」として扱われており、「学位取得」が目的ではないと思っていたらしい。留学生事務室に行き、慣れない中国語で北大のプリントを持ち出し、自分の留学形式を説明するのは大変だった。さほど時間を取られたわけでもなく、大して事務手続きがあったわけでもなかったが、これからの留学の大変さを暗示していたのかもしれない。

8 月末、大学院事務室に行くと時間割だけを渡され、一方的に「この時間に来い」とだけ通告された。指示された時間に行った第 1 回目の講義はよく覚えている。大学院の会議室。月曜日午後 1 時からの世界通史という講義だった。

一言も理解できない。

たった一言も、である。教授が喋る内容が全く聞き取れなかった。内容を一つとして理解することができなかった。30 分位必死に理解しようと集中するが、頭の中で「わからない」と繰り返されながら、次第に教授の声が右から左へ通り抜けていくようになる。集中力が落ちてきて次第に講義から抜け出したくなってくる。4 月に渡航し数カ月間中国語を勉強した。勿論自信満々だったわけではないが、「全く理解できない」とは思ってもいなかった。渡航日と同じだ。準備不足。不意打ちをガーンと喰らわされたような感じである。後から友人の学生にこの話をしたところ、「あの先生は早口で私たちも聞き取りづらいから」と言っていた。大学院を出たばかりの先生だったのか、確かに他の教授と比べてもしゃべるのが速かった。しかしそれにしても大学院生活の第一歩も、突然崖から落とされたような衝撃的なスタートだった。

他の講義も「一言も理解できない」という程ではなかったものの、やはり聞き取れなかった。他の学生が講義ノートを取っている中一人だけ全くペンを動かせなかった。特にジョークなどで他の学生が笑っていて、一人だけ笑えない瞬間は最悪である。一人だけ講義に参加できていないことをイヤと言うほど思い知らされ、疎外感すら感じることになる。勿論教授らが悪いのではなく自分の語学力の無さが問題である。こういう時は最早焦りとか「中国語勉強しなくちゃ！」といった感情を超え、自己嫌悪に陥ってくる。自分がそこにいること自体を悪く感じ、教授らに申し訳ない気持ちで一杯であった。

留学先、東北アジア研究院の講義ではレジュメやプリントの類は一切配られず、教授がひたすら 1 時間半しゃべり続ける完全座学の形式だった。しかも教授らは一切黒板を用いない。中でも講義の序盤で教授が挙げる参考文献、教科書の類を全く理解できなかったの

は痛かった。そこで他の学生にノートを見せてもらうことになる。漢字を見れば大抵のことは理解できる。頼みの綱だ。

しかし中国人学生のノートの漢字は極めて汚い。全てを画数の多い漢字で書くのだから必然崩しがちになる。例えば部首の「さんずい」「言偏」「立心偏」これらは全て「縦棒一本」すなわち数字の「1」のように書かれる。そうなると最早ノートを見ても理解できない。必死に読解を試みるが読み取れない。ノートが真っ黒になるほど乱雑に大量に書かれた漢字にクラクラしてくる。「ノートを写させてもらって理解しよう」と期待していた自分にはこれまた掛けられた橋を突然切り落とされたような大変な事件だった。結局講義は聞いて理解しなければいけないのである。教科書（参考文献）を購入し、教科書が真っ赤になるほどピンインを書き込み予習するのが唯一の対処法で、それを続ける中でようやく少しずつ講義を理解できるようになった。2005 年の後半半年はこんな毎日であった。

2006 年 5 月 30 日（悪夢の論文テーマ発表会）

講義が始まり約半年が経過し、徐々にリズムに乗り始めたことを感じていた。講義内容を少しずつだが理解し始め、苦痛もあまり感じなくなってきた時期だった。このままいけば何とかなると思っていたかもしれない。しかし大学院をこんなに簡単に終えられるわけもなかった。

5 月を過ぎ、突然指導教官から「来週論文テーマ発表会（「开提报告」）だから」と通告され、昨年度の学生の原稿を渡された。内容を見ると先行研究（文献）や研究方法、問題意識などをまとめ、論文のテーマを発表するといったものだった。論文で言えば序章の内容にあたる。発表会はそれをズラッと並ぶ教授の前で発表するというもので、ゼミのない中国の大学院で唯一の「論文途中経過発表会」のようなものであった。

勿論自分自身、論文のテーマのようなものは決めてあったし問題意識、やりたい研究も持っていた。渡された先輩の原稿を見ると大半が先行研究、文献の内容を纏めたものであった。日本でも同様のことはやっていた。何とかなると思った。原稿を渡されてからの約 2 週間、ひたすら慣れない中国語で原稿をまとめる作業に没頭した。発表会は偶然にも二十数回目の誕生日と重なっていた。青空が綺麗な日だった。

発表は惨憺たるもの…いやそれ以下だった。

批判を浴びる、内容を指摘されるといった問題以前だった。間違いなく、全ての学生の中で最もひどい発表だった。語学力の問題もあったが、自分の研究方法や問題意識が中国の研究方法とマッチしていなかったのも大きな問題だった。後でこの話を他の先生に言うと「そんな研究方法が中国で認められるわけないじゃない」と笑われた。日本と中国では研究方法が全く異なるのである。準備不足。もっと友人、同期らに見てもらわなければい

けなかった。

留学前から語学力は確かに問題だけど、研究ならなんとかなるだろうとタカをくくっていた。発表会を終え、廊下で指導教官から「このままじゃ卒業は難しいね」と言われた時のショック…恥ずかしさ、悔しさ、惨めさ、情けなさ…あらゆる言葉を動員しても表現することができない。目を充血させ、暗い研究院 5 階の廊下を一人トボトボと家路に向かった。二十数回目の誕生日はこうして一生忘れられない 1 日となった。

2008 年 5 月 25 日（論文発表会）

そんな発表会を経ていたため、最後の論文発表会も自分にとっても忘れられない一日となった。既に帰国していた自分は指導教官から相変わらずの突然の連絡を受け、発表会の日程を聞き慌ただしく長春へ飛んだ。論文は既に教授のチェックを終え、友人に提出してもらっていた。残すは最終発表のみだった。

前の「論文テーマ発表会」のように吉林大学大学院では学科ごとに論文の最終発表会を行う。それにパスできなければ卒業できない。論文テーマ発表会のように論文の内容を審査員（教授ら）の前で発表する。しかも発表するだけではない。発表を終えると審査員から質問（問題？）が飛んできてそれらにも適切に答えなくてはならない。前述の誕生日の悪夢は正直払拭しきれていなかった。

友人らと準備した原稿を読み、辿々しいながらも発表を何とか時間内に終えると早速質問が飛んでくる。審査員の一人は外部（東北アジア研究院外）の教授だった。わかりにくい中国語を必死に聞き取りノートに取る。質問が終わると 10 分ほど別室で回答の準備をする時間が与えられる。別に一人で考えるのではなく、話しあっても良い。質問自体はそれほど難しくなかったものの、友人らが「質問聞き取れた？」などと言いながら書き取ったノートを見せてくれる。指導教官も「〇〇先生の質問は別に答えなくていいから」などアドバイスをくれる。「こう答えようと思っています」と教授に言うと「OK、まぁ自由に答えろ」と相変わらずの気楽さで言われた。電気もついておらず、うっすら太陽が差し込む研究院会議室で先輩らと回答を準備した光景は鮮明に覚えている。

再び発表会場に戻り、質問に答えるとその後「審査」の時間となる。卒業できるか否かが皆の前で発表される。よく憶えていないのだが、教授陣、自分双方が退出したのだと思う。待っている廊下で「大丈夫かな」と不安がる自分に「大丈夫。問題ない」と友人が言ってくれた。

論文を提出し、発表をしっかりすれば卒業できる。皆それで卒業できている。論文も提出し、発表も終えた。飛んできた質問にも答えた。大丈夫なはず。この審査は「形式」に過ぎないだろうことは理解していた。しかし「万が一」「もしかしたら…」と悪いことが何

度も頭によぎる。もしかしたらこれまで 3 年の苦労が全て水の泡と消えてしまうかもしれない。

そして読み上げられる審査結果。

「伊藤健の修了を認める」

その言葉を聞いた瞬間は「嬉しかった」、というより力がぬけたようだった。何も発することもできず、ただ「あああああ」という声にならない言葉が頭の中で繰り返されるだけだった。もしかしたら感動していたのかもしれない。指導教授をはじめ審査員（教授ら）は皆笑顔だった。全く講義が理解できない学生を受け入れたのは彼らも初めてだっただろう。やれやれと思っていたのかもしれない。教授陣が自分の前で笑顔だったのはこれが初めてだった気がする。

傍聴していた先輩や友人の拍手の音が会場に響く。おめでとうと言ってくれる。やっと卒業を、この留学が終わったことを認識する。たった一人、名前も中国語で言えぬまま渡航し、最後の最後にこうして多くの人に祝福され卒業できるようになったことのだなと感じられた。

■おわりに

こうして 3 年に及ぶ長い長い留学はようやく幕を閉じた。大半の時間が苦労や悩み、不安、ショックを受けていた時間で、中国にいた時間の 9 割方自分は顔をしかめていたに違いない。渡航前こんなに苦労すると知っていれば留学はしていなかったかもしれない。

しかし、「もう一度この留学をしようと思うか」と聞かれたらノータイムで「やる」と応えてしまうだろう。海外にはこんなにも自分を揺さぶる出来事が溢れている。世界は素晴らしい。それを知れたことこそ、私の長い長い留学の最大の収穫である。